

## 〈新名誉会員の紹介〉

### 河田 龍 夫 氏

明治44年 2月20日生  
現住所 神戸市北区広陵町  
2-47  
本籍地 香川県綾歌郡飯山  
町川原982



河田龍夫氏は、当日本OR学会の創立者の1人でこの学会の基礎を作られた方です。第1回および第2回のIFORSには自ら参加して、日本のIFORS加盟の道をつけてくれましたし、日本OR学会の設立においては、自らの研究室を準備事務局として、設立に努力されました。設立当初から、フェロー制度を設けたり、和文と英文の2種の論文誌を刊行したり、年2回の研究発表会を開催するなど、学会としての基本的な活動を実行されました。

当時は、ORが産業界で認知されることが大切という観点からではないかと思われませんが、会長には産業界の重鎮をお願いし、河田龍夫氏ご自身は初代の副会長として、基礎作りに努力されました。また、日本における待ち行列研究の草分でもありましたが、日科技連におけるOR教育コースも同氏が中心になって始められたことや、東工大や慶応大学等勤務された大学での後進の育成を含め、わが国のOR研究に重大な貢献をされました。

理事会は同先生のご功績をたたえ、名誉会員に推薦することを決め、去る4月26日の総会に諮ったところ、満場一致で可決されました。ここに、ご報告を兼ね、同氏に対して心からの感謝の意を表したいと思えます。

#### 略 歴

昭和8年3月 東北帝国大学理学部卒業  
同大学副手、助手、仙台高等工業学校教授、第一生命保険副アクチュアリーを経て  
昭和19年6月 文部省統計数理研究所所員  
昭和16年 理学博士(東北帝国大学)  
昭和22年10月 東京工業大学教授  
昭和36年9月 アメリカ・カソリック大学教授

昭和44年8月 慶応義塾大学工学部教授  
昭和54年5月 東京工業大学名誉教授  
昭和59年 勲3等瑞宝章授与

#### OR学会関係

評議員 昭和32~54年度  
副会長 昭和32・33年度  
フェロー 昭和39年4月  
授賞 第6回日本OR学会普及賞

### 森 村 英 典 氏

昭和3年10月20日生  
現住所 横浜市緑区青葉台  
1丁目26番地1号  
本籍地 同上



森村英典氏は、日本におけるORの研究・普及の草創期から一貫して活動をされてこられた。日科技連でのOR研究会(通称河田部会)に参画されて以来、OR学会設立にたずさわられ、幹事、理事、副会長、会長の重責を果たされてきた。まさにOR学会の歴史とともに歩んでこられた。

編集理事のときに、日科技連刊行のオペレーションズ・リサーチ誌の編集、発行を学会に移管し、OR学会の顔として定着させ、学会員の情報交換と知識のブラッシュ・アップに大いに貢献された。

東京工大では応用物理学科、情報科学科、システム科学科の設立に関与され、幾多の学生を指導され、多くの信望を得て評議員、理学部長の要職を務められた。その後、筑波大で社会人大学院の創設を引き受けられ、社会人教育に新しいブームを惹き起こされた。

研究面では、ヒンチンの名著「待ち合わせ理論入門」の訳出により多くの研究者に刺激を与え、大前氏との共著「応用待ち行列論」により待ち行列理論の普及に貢献され、さらにOR学会の研究部会等を通じて後進の育成にあたられた。

氏とともにお仕事された方の誰もがいわれるように、その誠実無比なお人柄、判断の適正さ、決断と仕事の速さなど、正に頼りになる人である。

理事会は同氏の功績をたたえ、名誉会員に推挙したと

ころ、去る4月26日の総会にて満場一致で可決されました。ここにご報告を兼ね、同氏に対して感謝の意を表したいと思います。

### 略 歴

昭和26年3月 東京工業大学卒業（応用数学課程）  
 同年4月 統計数理研究所研究員  
 昭和28年6月 東京工業大学助手（数学教室）  
 昭和37年3月 理学博士（九州大学）  
 昭和38年7月 東京工業大学助教授（応用物理学科）  
 昭和43年2月 同 教授（応用物理学科）  
 昭和47年3月 同 教授（情報科学科）  
 昭和50年4月 同 大学院総合理工学研究科協力  
 昭和63年4月 同 理学部長併任  
 平成元年4月 同 名誉教授  
 筑波大学教授（社会工学系）

### OR学会関係

評議員 昭和47～58年度  
 理事 昭和46・47年度、50・51年度  
 監事 昭和54・55年度  
 副会長 昭和58・59年度  
 フェロー 昭和61年4月以降  
 会長 昭和63～平成元年度  
 その他 表彰・研究普及委員、論文誌・OR事例集編集委員長、長期計画作成ワーキング・グループ主査、日本学術会議経営工学研究連絡委員等を歴任  
 授賞 第2回日本OR学会普及賞

報文集 T-86-1

## 南北協力の新しい戦略

——マイクロ電子技術を起爆として——

頒価会員3,500円  
 英文別刷1,000円

現在の世界は、人口の1/4を占める先進国が富の約8割を占め、先進国と発展途上国との貧富の格差はますます増大しつつある。先進国で余ったカネは中進国に貸付けられて、債務は危機的状況にまで膨らんでいる。世界経済の崩壊が懸念される今日、世界規模での新マーシャル計画が主張されている。単なる金銭援助ではなく、第三世界の自立発展を促す方向での技術移転をともなった援助計画が必要であろう。このような意識に基き、OR研究者の目で見て何らかの寄与ができるのではないかの願望をもって、森口繁一本学会元会長を主査とする研究部会が組織されたのは1982年4月であった。

爾来4年余、同主査を中心に続けられた活動の成果をまとめたのが、本報文集である。1985年1月号の本誌には「第三世界とマイコン」というテーマの特集を組み、それまでの研究の一応の総括を行なっている。この内容のうちの若干を英文にした第I部、主として1985年の活動で得られた知見を中心にまと

めた第II部、それにいくつかの記録を集めた付録から成っている。

第II部冒頭の「虚の世界と実の世界」では人類の生活向上のために、実際に富を生産し活用する「実の世界」と、本来はその運行を援けるための貨幣経済が築く「虚の世界」を意識的に分けてみる視座を提唱し、そして現在の「世界の難問」、すなわち全世界が「虚の世界」に振り回されている危機的状況を回避する方策を、西側先進国、特にわが国に対して提案する。

以下「マイクロ電子技術と国際経済の活性化」「エネルギー有効利用と産業構造の関係からみた技術移転問題」「資本の国際移動と国際分業の便益」「軟らかい産業基盤のためのマイコンの所要台数」「体験的技術協力論」「第三世界におけるパソコン用エキスパート・システムの役割」「東南アジアの中小企業育成と日本の協力」「マレーシアの産業事情」等が収められている。